



TITLE:

京大広報 No. 303

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 303. 京大広報 1985, 303: 23-32

ISSUE DATE:

1985-12-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209379>

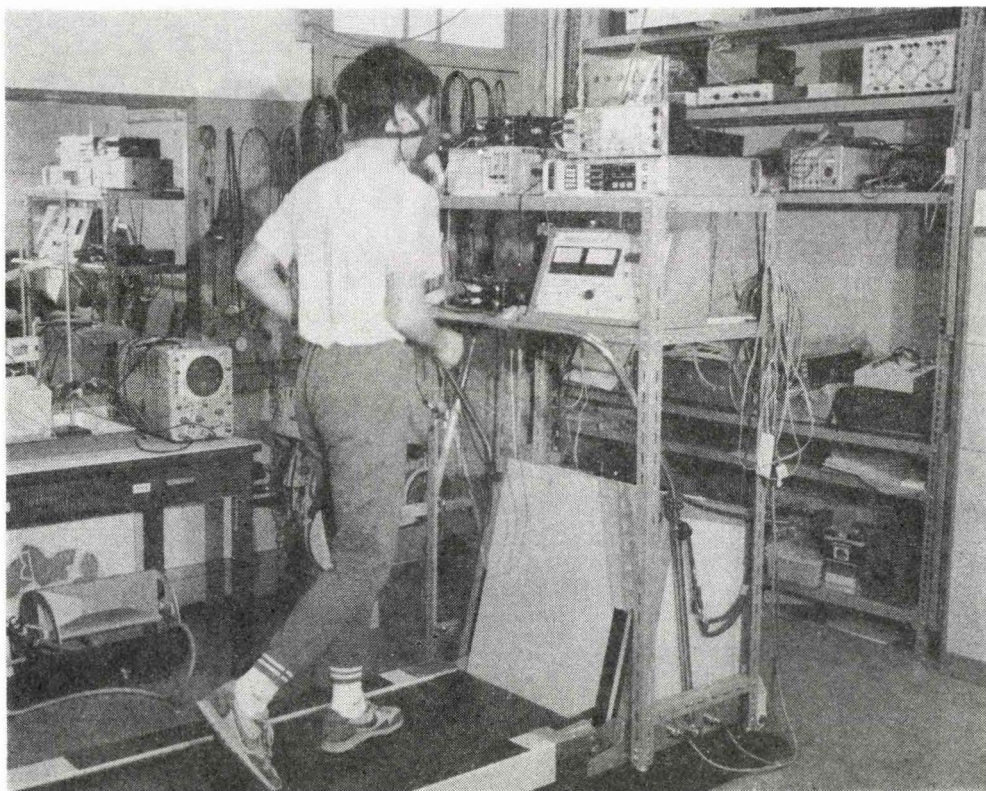
RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

京大広報

No. 303

京都大学広報委員会



トレットミル走行中の血圧、心拍数、酸素摂取量の連続測定 —関連記事本文30ページ—

目 次

年末年始の火災予防と特別防火演習	24
共通第1次学力試験の実施	24
学術博士及び学術修士の基準と審査手続 に関する答申	25
外国人学者・留学生懇親会	29
東南アジア研究センター創立20周年を迎える	29

〈紹介〉	
体育指導センター	30
日 誌	31
〈随想〉	
いのち短し——	
名誉教授 石井完一郎	32

＜大学の動き＞

年末年始の火災予防と 特別防火演習

年末年始の火災多発期を控え、この機会に、本学教職員、学生等には、防火についての認識と理解を一層深めることが必要である。

消防署による夏期の立入検査の結果、ガス器具とガスゴム管との接続部の不備、消火器の未設置及び未更新、廊下等避難経路上の支障物、コンセントからタコ足配線等種々の不備事項を是正するよう指示されている。これらの是正指示事項に留意し、防火管理の強化及び消防用設備の点検等早急に改善しなければならない。

学内の火災事故に備えて、自衛消防団が置かれているが、恒例の自衛消防団年末特別防火演習を、今年は12月18日（水）に実施する。当日は附属図書館の協力により附属図書館の4階から出火したものと想定し、通報、連絡、初期消火、避難、誘導、救出、物品搬出等一連の総合訓練を行い、自衛消防団の消防車によるほか、左京消防署からも数台の消防車が出動し、消火訓練等が行われる。病院地区においては11月29日（金）と12月11日（水）に実施済みであり、宇治地区では12月25日



病院地区の消防訓練（11月29日）

（水）に実施の予定である。また、以上のほか工学部等部局単位による防火訓練が実施されている。

共通第1次学力試験の実施

昭和61年度の共通第1次学力試験は、昭和61年1月25日と26日の両日に実施される。

本学に協力する大学は、昨年度と同様に京都府立医科大学である。

試験の概要は、次のとおりである。

1 日時と教科

1月25日（土）	国 語（10：00～11：40）
	数 学（13：00～14：40）
	外国語（15：30～17：10）
1月26日（日）	社 会（10：00～12：00）
	理 科（13：20～15：20）

2 試験場と志願者数

北部構内試験場	834人
南部構内試験場	750
（医学部・薬学部構内）	
教養部構内試験場	3,047
本部構内試験場	2,861
京都府立医科大学試験場	334
志願者数計	7,826

このため本学では1月24日（金）及び25日（土）の授業が休止される。

なお、今年度の西日本地区の追試験は、本学が担当することになり、疾病・負傷・交通事故等で本試験を受験できない者を対象として、2月1日（土）、2日（日）の両日に実施される。

学術博士及び学術修士の基準と 審査手続に関する答申

大学院審議会制規等専門委員会より、このたび学術博士及び学術修士の基準と審査手続について答申を受けました。これについて、12月10日開催の大学院審議会において審議の結果、承認されましたので、ここに答申全文を掲載して、広く学内にお知らせします。

学術博士及び学術修士の本学における性格、基準等について、昭和53年3月に制規等専門委員会に諮問し、昭和54年6月に当面の基準、運営手続及び検討すべき点について答申を受けましたが、その後、本学において学術博士に対する関心が深まったこと、及び一般の学位の性格等についての了解と審査手続の整備が進んだことによって、今回同専門委員会から、改めて学術博士及び学術修士の基準と手続等について答申されたものであります。

本学において、複数分野の協力による研究・教育が進展し、また研究科の新設が検討されている現在、学術博士及び学術修士は、学位制度における重要な問題となっています。このような課題について、審議を重ねて答申を作成された制規等専門委員会の委員各位に対して、ここに深甚な感謝の意を表します。

昭和60年12月11日

総長 沢 田 敏 男

昭和60年11月22日

大学院審議会議長

沢 田 敏 男 殿

大学院審議会制規等専門委員会

委員長 吉 沢 尚 明

学術博士及び学術修士の基準と
審査手続（答申）

学術博士及び学術修士を本学において採用する場合のその性格と審査手続等について成案を得ま

したので、答申いたします。

1. 本答申作成の目的と経緯

（目的）

学術博士及び学術修士について、本委員会は昭和54年6月に、当面の基準、運営手続及び検討すべき点等を答申した。その後、本学における学位の性格及び水準についての了解事項等が確定し、また異なる分野間の協力による研究等に関連して、学術博士に対する学内の関心が高くなっている。この状況の下で、ここにこの学位の性格、審査手続、及び関連する学内規程の改正について答申し、前答申に代えるものとする。

（経緯）

（1）昭和49年6月及び昭和53年3月に、それぞれ学術博士及び学術修士が新設された。これらの学位について文部省が行った説明（資料1）の要点は次のとおりである。

学術博士——(i)当面は在来の学位と異なる分野のもの、特に学際領域等総括的な領域の学位とすること、(ii)博士の学位の種類を増やさないためのものでもあること、(iii)水準は在来の学位と同等であること。

学術修士——(i)在来の修士の学位が適当でないと考えられる分野において授与できるものであること、(ii)ただし（上の博士の場合と異なり）修士の学位の種類は、今後必要に応じて増加し得るとされていること。

（2）本学においては、旧大学院制度検討委員会が学内の意向を調査したのち、学術博士について、ほぼ文部省による上掲の説明の趣旨で制度的に認めることとしたが、実施のためにはこの学位の性格を明確にし、基準を設ける等、慎重な準備を要する旨を答申して、承認された（「大学院制度の改革について」（昭和50年3月）の項9）。

（3）本委員会は昭和54年6月に、「学術博士及び学術修士について」を答申して、当時の時点における基本的態度、基準、及び検討すべき点を明確にし、大学院審議会において承認された。

（4）昭和57年10月、大学院審議会において、本委員会の答申「博士の学位の性格及び水準並びに審査手続について」が承認された。

(5) 他大学においては、現在、相当広範囲に学術博士及び学術修士の学位が採用されている(資料3)。

Ⅱ．学術博士及び学術修士の性格

本学において、学術博士及び学術修士の性格は、基本的に以下のように考えるのが適当である(本学における博士の学位の性格及び水準については、資料2を参照)。これを大学院審議会の了解事項とするのが適当と考えられる。

大学院審議会了解事項 学術博士及び学術修士の性格

- (1) 学術博士の授与は、学際的研究等を対象とし、かつこの学位が既存の種類の学位より一層適当である分野の場合とする。
- (2) 学術博士の性格及び水準は、本学における在来の学位の場合と同等のものとする。
- (3) 学術博士は、新設の研究科において採用し得るとともに、既設の研究科においても、在来の学位と併用することができる。
- (4) 学術博士は、いわゆる課程博士及び論文博士のいずれにも授与することができる。
- (5) 修士の学位については、新しい修士の学位が必要となった場合は、個別の研究分野を表す名称の修士の学位を使用するか、あるいは学術修士を使用し得るものとする。

Ⅲ．学術博士及び学術修士の審査手続等

大学院審議会決定事項 学術博士及び学術修士の審査手続等

- (1) 学術博士を採用しようとする研究科は、その研究科におけるこの学位の対象となる分野、基準、教育・指導の方法について、また在来の学位と併用しようとする場合は、更にその在来の学位との関係について定め、大学院審議会に報告して承認を得るものとする。
- (2) 学術博士の審査は、在来の学位と同様の手続によって行う。
- (3) 学術博士については、いわゆる論文博士の場合にも、学位記及び学位授与証明書

に、研究科名を付記する。

- (4) 学術修士の審査手続等は、上述の学術博士の該当する項目に準じる。
- (5) 学術博士を授与した場合、新しい学位の性格を学内に周知させるために、当該研究科は当面、その学位論文の審査の要点を大学院審議会に報告する。

Ⅳ．学内規程の改正

学術博士及び学術修士の採用を可能とし、また本答申の趣旨に沿って、以下のように学内規程を改正するのが適当である。

1．京都大学学位規程の改正(案)

京都大学学位規程第1条に次の項を加える。

「2 前項に規定するもののほか、別に定めるところにより、学術修士及び学術博士の学位を授与することができる。」

2．京都大学通則の改正について

学術修士を採用した研究科について京都大学通則第49条に、また学術博士を採用した研究科について同第50条に追加する。

3．学位記の改正について

本答申Ⅲの項(3)の趣旨によって、学位記の様式の改正を、今後検討することが必要である。

資 料〔1〕

- 大学院設置基準の制定及び学位規則の一部を改正する省令の制定について

(昭和49年7月17日 文部省通達)(抄)

文 大 大 第375号

昭和49年7月17日

各国公私立大学(短期大学を除く。)長 殿

文部事務次官

岩 間 英太郎

大学院設置基準の制定及び学位規則の一部を改正する省令の制定について(通達)

このたび、大学院設置基準(昭和49年文部省令第28号)及び学位規則の一部を改正する省令(昭和49年文部省令第29号)が昭和49年6月20日に公布され、それぞれ

昭和50年4月1日から施行されることになりました。

今回の措置は、大学院及び学位制度の全般について、学術研究の進歩、社会の発展等に柔軟に対応し得る制度を確立し、それを基盤として、各大学の自主的努力とあいまって、大学院の整備充実を図り、もってわが国の学術文化の進展に資そうとするものであります。

これらの省令の要旨及び留意点は、下記のとおりですので、十分御了知の上、その運用に遺憾のないようお取り計らいください。

記

第1 大学院設置基準の制定について

(略)

第2 学位規則の一部改正について (一部略)

6. 学術博士の新設

博士の種類として、次のとおり新たに学術博士を設けたこと(学位規則別表第1)。

- (1) 学術博士は、最近の学術研究の発展に対処し、かつ、学位の種類を簡素化を推進するという観点から、既存の博士の種類と同水準の総括的な博士の種類として設けたものであること。
- (2) したがって、学術博士は、広く学術の各分野について授与することが可能なものであるが、新しい観点から設けられた博士の種類であることにかんがみ、その取扱いについてはなお慎重を期すべき点があるので、当面は、学際領域等既存の種類の博士を授与することが必ずしも適当でない分野を専攻した者について授与することが適当であること。

3月1日公布され、同日、施行されました。

この省令による改正の内容等は下記のとおりですので、十分御了知のうえ、その運用に遺憾のないようお取り計らいください。

記

1. 修士の種類として新たに「学術修士」を加えたこと。
2. 「学術修士」は、学際領域等を専攻した者で現行の種類の修士を授与することが適当ではないと考えられる場合に授与することができるものとして設けられたものであること。また、修了者に対し「学術修士」を授与するか現行の修士を授与するかは、各大学院(研究科)の判断によるものであること。
なお、「学術修士」は、修士の種類を簡素化を図ろうとする趣旨から設けられたものではないこと。

3. この改正に伴い、各大学において学位規程等学内諸規程の整備を行った場合においては、速やかに報告又は届出を行うこと。

資 料〔2〕

博士の学位の性格及び水準並びに審査手続について
(抄)

(答 申 年 月 日 昭和57年5月28日)
(大学院審議会承認年月日 昭和57年10月12日)

I 本学における学位の性格及び水準

§1. 了解事項

- (1) 各研究科の博士の学位の性格及び水準は、それぞれの研究科の目的・性格によって定まるべきものである。
- (2) 各研究科はその学位が高い水準を保つように努める。
- (3) 現状においては、いわゆる課程博士と論文博士は性格及び水準においては基本的な差異はないとするのが適当である。
- (4) 新しい種類の学位を設け、又は学位の新しい運用を行う場合にも、以上の3項目に基づくこととする。
- (5) 新しい種類の学位を設け、又は学位の新しい運用を行う場合、その発足後当分の間は、学位の授与について事後に大学院審議会に報告することとする。

○ 学位規則の一部を改正する省令の制定について

(昭和53年3月1日 文部省通知) (抄)

文 大 大 第113号

昭和53年3月1日

大学院を置く

各国公立大学長 殿

文部省大学局長

佐 野 文一郎

学位規則の一部を改正する省令の制定
について (通知)

このたび学位規則(昭和28年文部省令第9号)の一部を改正する省令(昭和53年文部省令第3号)が昭和53年

資 料〔3〕

国立大学における学術博士の授与状況

区 分 (年度)	学 位 の 種 類								備 考 1. 授与研究科名 2. 学位の種類
	学 術 修 士				学 術 博 士				
	55まで	56	57	58	55まで	56	57	58	
北 海 道	77	25	27	28	甲 1		4	4	1. 環境科学研究科 2. 学術
					乙		4	2	
筑 波	167	65	73	63	甲 2	1	1	2	1. 環境科学（修士課程）。社会工学， 芸術学（全研究科授与可能） 2. 学術。学術，学術と文学
					乙 1		1	2	
埼 玉	2	4	7	9					1. 政策科学研究科（修士課程） 2. 政治学，学術
東 京 芸 術					甲	2		1	1. 美術研究科及び音楽研究科 2. 学術
					乙				
お茶の水女子					甲 3	2	1	1	1. 人間文化研究科（後期3年の課程） 2. 学術
					乙		2		
静 岡					甲	1			1. 電子科学研究科（後期3年の課程） 2. 工学，学術
					乙	1			
大 阪	27	17	12	11	甲 1	1	1		1. 人間科学研究科（全研究科授与可能） 2. 学術
					乙		1	2	
奈 良 女 子					甲			1	1. 人間文化研究科（後期3年の課程） 2. 学術
					乙				
神 戸					甲	4	20	21	1. 文化学，自然科学の両研究科（後期3年の課程） 2. 文と学術，理，工，農と学術
					乙				
広 島	41	30	31	28					1. 生物圏科学研究科（60年度設置） （修士は，前「環境科学研究科」） 2. 農学，学術を予定
計	314	141	150	139	甲 7	11	27	30	
					乙 1	1	8	6	

外国人学者・留学生懇親会

外国人学者・留学生懇親会が12月9日（月）、午後6時から京都グランドホテルで、外国人学者、留学生、教職員、招待者等約650名が出席して開催された。これは、恒例の留学生懇親会が、外国人学者と合同で開かれたものである。

懇親会は、最初に、沢田敏男総長の挨拶があった後、引き続いて道田信一郎国際交流委員会委員長の挨拶、朝尾直弘学生部長の発声による乾杯でパーティーが始まり、フィリピン、中国、タイの舞踊や各国の歌が披露され、12月15日に退任される沢田総長へ留学生から花束が贈られ、午後8時すぎ閉会した。



<部局の動き>

東南アジア研究センター 創立20周年を迎える

本年で創立20周年を迎えた東南アジア研究センターは、12月5日京大会館において記念式典を挙行了。式典には、沢田敏男総長、平沢興、奥田東両元総長をはじめ、学内外から関係者約130名の出席を得て盛大に執り行われた。

東南アジア研究センターの揺籃期は、昭和34年に始まる。この年の秋、我が国における東南アジ

ア地域研究のパイオニア的存在として、学内有志教官を中心に東南アジア研究会が組織された。その後幾多の曲折を経て、昭和38年1月に学内処置として東南アジア研究センターが設置され、ついで昭和40年4月に、国立学校設置法施行規則により、東南アジア研究センターの官制化が実現される運びとなった。当初1研究部門、教官4人で出発した研究組織も、現在では国内・国外客員部門を含む11研究部門、教官26人を擁する組織にまで成長した（詳しくは本広報No.301を参照）。

記念式典は午前10時30分より始まり、石井米雄東南アジア研究センター所長の挨拶のあと、沢田総長、山本達郎東京大学名誉教授（日本学士院会員）、手塚晃埼玉大学教授（文部省学術国際局科学官）からそれぞれ祝辞が述べられた。祝電も国内ばかりでなく、本センターの国際性を反映して、タイ、インドネシア両国の学術会議、欧米における東南アジア研究の中心的機関であるロンドン大学東洋アフリカ研究所、コーネル大学東南アジア・プログラムなど国外からも多数寄せ



られた。

式典終了後祝賀会が催され、平沢元総長の音頭で乾杯し、奥田元総長から東南アジア研究センター設立当時の思い出話が語られた。祝賀会はなごやかなうちに午後1時閉会した。なお、東南アジア研究センターは、創立20周年記念の一環として、論文集『東南アジア世界の構造と変容』の刊行、明年3月にはシンポジウム「東南アジア世界への視座——総合生態学の方法を求めて——」の開催を予定している。

昭和59年度には 東南アジア 研究センター 新館

(東棟) 増築部分の竣工、本年度には資料部の旧京都織物株式会社本館への移転が完了し、研究施設の一層の充実化がみられた。また、本年度から新規共同研究プロジェクト「東南アジア世界の成立と展開に関する文明論的総合研究」もスタートしている。創立20周年を一つの区切りとし、東南アジアを単なる研究のフィールドにとどめることなく、東南アジア研究をつうじてより普遍的な学の創造を目指すべく、センター・スタッフ一同今後ともに調査・研究に努力する覚悟である。

(東南アジア研究センター)

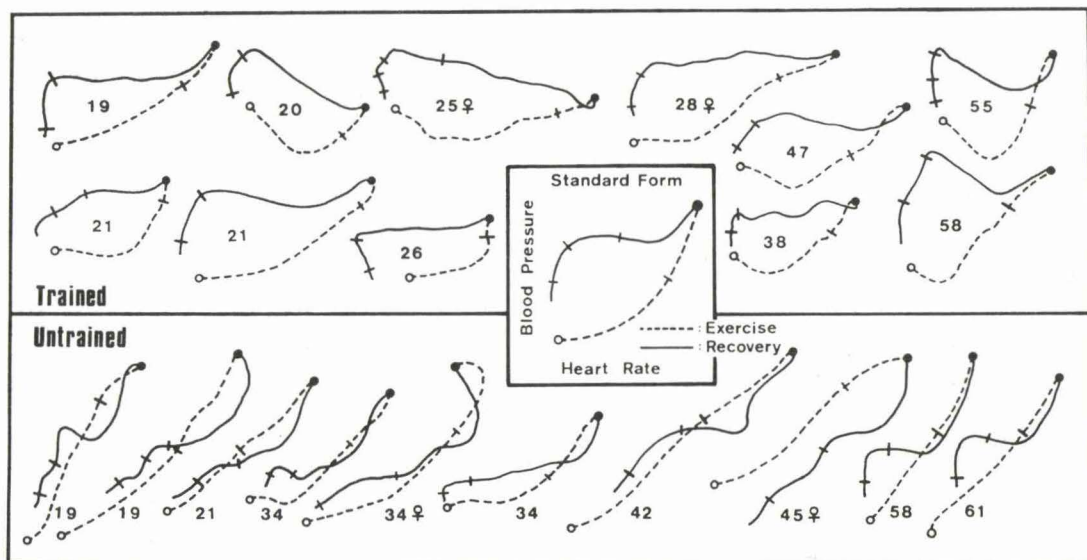
< 紹 介 >

体育指導センター

体育指導センターは昭和47年、国立学校設置法施行規則の改正により、学生の体育活動の指導、助言その他学生の体育指導に関する専門的業務を行うための施設として設置された。このような施設は国立大学では北海道大学と本学にあるのみである。開設以来、本センターは、体育会及び同好会所属の運動部員や一般学生、時には教職員などを対象に、体力測定、体力相談、トレーニング

指導、あるいは参考図書や資料、文献類の紹介などのサービス業務に携わってきた。センターの常勤スタッフは助教授1名のみで誠に小所帯であるが、サービス業務の傍らスポーツ科学に係わる研究活動にも積極的に取り組んでいる(つもりである)。

さて、本センターで行われているユニークな研究活動の一つに、運動中の被験者の血圧変化と心拍数変化の連続測定がある(表紙写真)。これは、前センター長である万井正人現名誉教授開発の連続血圧測定装置なしには出来ない研究である。ご



BP-HR リサーチ図形

(図の上半分は鍛練者のパターン、下半分は非鍛練者のパターンで、図中の数字は被験者の年齢を示す。)

承知の通り、従来の血圧測定の方法では、たとえ最新の電子式血圧測定装置を用いても、一つの血圧値を求めるのに相当の時間を要するので、連続的に血圧測定をすることは極めて困難で、なかなか運動中に連続測定を行うことは、動脈中にカテーテルを挿入する以外には殆ど不可能であった。この装置を用いて、様々な状況下での被験者の血圧変化を連続的に観察すると、これまで知られていなかった血圧の側面をいろいろと知ることが出来、多くの貴重なデータの蓄積をみている。

例えば、被験者に、一定負荷の運動を一定時間にわたって行わせた際の、最高血圧と心拍数の変化を連続測定し、X-Yプロットに入力描画させると、リサージュ曲線状の図形を得ることが出来る。この図形は「BP-HR リサージュ図形」と呼ぶことにしているが、図に見られるように鍛練者と非鍛練者ではパターンに明確な違いが表われるので、運動選手の循環機能を判定する際の参考になる。

血圧が喜怒哀楽の感情、即ちエモーションの影響を受けることはよく知られている。そこで、被

験者にゴム風船を保持させてこれが割れるまでふくらませてみたり、消防用の梯子車にのせて空中高く持ち上げてみたり、囲碁や将棋などの勝負事をやらせてみたり、スポーツでひいきのチームや個人を応援させてみたり、あるいは競馬場に向いて実際に馬券を買わせて賭事をやらせてみたりして、実験室内や外で恐怖、不安、怒り、喜び、期待、得意、失望、落胆などの各状況に遭遇させて様子を調べてみると、恐怖時や不安時には予想通り血圧が上昇するが、失望時や落胆時にはむしろこれが下降することが判明した。更に、興味深いことは、喜んだり、期待したり、得意満面になったりという、心がはやりたり浮き浮きしたりするような状況下では、血圧に一過性の大きな上昇が見られることである。このことから、高血圧の気のある方は、おおいに失望や落胆の機会を持たれることが望ましく、且つあまり喜んだり得意になったりというような事態は努めて避けられた方が無難であるとも言えそうである。

(体育指導センター)

日 誌

(1985年11月1日～11月30日)

11月7日 人文科学研究所開所記念公開講演会
 8日 同和問題委員会
 ク 環境保全委員会
 9日 スウェーデン王国 Uppsala 大学 Urban Dahllöf 教授来学、総長及び関係教官と懇談
 10日 スウェーデン王国及びノルウェー王国 Nobel 財団関係者 (Nobel 財団 Sune Bergström 理事長外7名) 来学、総長及び関係教官と懇談並びに講演 (11日まで)
 11日 本学主催 学術講演会及び特別講演会
 ク スイス連邦工科大学 Hans von Gunten 副総長来学、国際交流委員会委員と懇談
 12日 評議会
 13日 安全委員会
 15日 ポーランド人民共和国 Jagiellonski 大学 Jozef Andrzej Gierowski 学長外1名来学、国際交流委員会委員長及び関係教官と懇談並びに学内施設見学

16日～17日 総長候補者の選挙
 17日 臨時評議会
 18日 発明審議委員会
 20日 国際交流委員会
 25日 インドネシア共和国 Padjadjaran 大学 Yuyun Wirasasmita 学長、Tadulako 大学 A. Mattulada 学長及び Cenderawasih 大学 Rudolf C. Tarumingkeng 学長来学、文学部長及び関係教官と懇談並びに学内施設見学
 26日 建築委員会
 ク 保健衛生委員会
 29日 学位授与式
 30日 ビルマ連邦社会主義共和国医学教育視察団 (Mandalay 医科大学 U Tun Thin 学長外2名) 来学、国際交流委員会委員長及び関係教官と懇談並びに学内施設見学

